

グルネとフォルボネの自由と保護の経済学 (下)

米 田 昇 平

はじめに

1. グルネの生産力主義
2. フォルボネの商業社会論——自由と産業保護——
 - (1) 相互依存の体系 (以上前号)
 - (2) 貨幣論 (以下本号)
 - (3) 外国貿易論
3. フォルボネの奢侈論と重農主義批判
 - (1) 奢侈論
 - (2) 重農主義批判

(2) 貨幣論

フォルボネの貨幣論には、数量説、価値の蓄蔵機能への着目ないし消費需要水準の視点、さらにいわゆる連続的影響説が併存しており、この意味で彼の貨幣論は決して理論的に首尾一貫していたわけではない。彼は貨幣は物産の表徴にすぎず、「貨幣は物産によって引き寄せられ、その所有によって物産との交換の保証が失なわれないかぎりでしか価値を持たない」として、貨幣が交換の媒介的手段としての機能を十分に果たし、物産が不断に貨幣と交換されてとどまるところがない状態を貨幣の「自然的流通 (une circulation naturelle)」と呼ぶ。貨幣がこの自然的機能にとどまるかぎりは、貨幣量の増減はそれに応じた物価の騰落を招来するにすぎず、したがって貨幣機能は実物経済に対して常に中立的であって貨幣量の多少は問題にならない。「もし表徴の対象となる数量が同じままなのに表徴する側の数量が増加すれば、シーニュの総量は増すが、その機能が高まるわけではない。……交換の容易さのために重要な点は、シーニュの総量が多いか少ないかにあるのではなく、貨幣と物産の所有者がそれらを振り分ける際に、彼らが望むときに、お互いの量に応じて慣行により決められた割合でそれらを交換することのできるその確実さにある」 ([1], II, pp. 54-5)。

このようにフォルボネは貨幣の自然的機能を前提にしてモンテスキューやヒュームの貨幣数量説を引き継いでいるが、しかし彼は他方で貨幣は価値の蓄蔵機能を発揮して「自然的流通」から離脱しうることに着目し、このような「複合流通 (une circulation composée)」によって経済に重大な影響が生じうる

と考えた⁽¹⁾。例えば不信用によって貨幣の予備的需要が増大し、貨幣が蓄蔵されて流通から引き上げられてしまえば、それだけ支出は減少し、消費需要水準は低下するから生産規模は縮小する。「貨幣は消費を望まない人によって保蔵されうる」 ([2], I, p. 121)が、「一国に不信用の動機が多くあるほど貨幣はそれだけ多く保蔵される、……(これによって)流通が自然の状態から乖離するほど、産業に従事する人々の消費は減少し、消費購買力は平等に分配されなくなる」 ([1], II, p. 58)という次第である。ここに貨幣が価値の蓄蔵機能を発揮することによって「貨幣の本質からの転倒」が生じて、経済の収縮過程を加速するとしてボワギルベールと同じ論理をみることができる。この論理のかぎりではボワギルベールの場合と同じく、人々に消費を望ませない原因、すなわちこのケースでは不信用の原因が除かれないかぎり、貨幣供給量がいくら増加しても、増加した貨幣は購買力を発揮せずに蓄蔵されてしまうにすぎない。貨幣供給量の増加がただちに支出の増加をもたらすわけではないのである。フォルボネはここで消費需要水準の視点に立っていることは明らかであるが⁽²⁾、しかしボワギルベールが貨幣は「消費のしもべ」にすぎないとして、この視点から消費需要水準をいかに高めうるかという問題に向かったのとは異なって、フォルボネは他方で連続的影響説の立場から、貨幣を購買力と同一視する視点を単純に押し進めて、貨幣量の増減それ自体が直接に購買力ないし支出の増減をもたらすことで生産規模に直接に影響を及ぼしうると考えた。

数量説の立場に立てば貨幣機能は中立的であって貨幣量の多少は問題にならないが、あとの2つの立場からいえば (有効需要の視点と連続的影響説)、それぞれの理論的立場は異なるものの、貨幣は中立的であるどころか購買力水準への影響を通じて実物経済に大きな影響を及ぼしうる。次の一文はこのような矛盾を端的に示すものである。「シーニュの総量それ自体は、貨幣と物産の相互の数量に応じてそれらの所有者の間に交換の相互の確実さを確立するのに無関係であるとしても、逆に、それをもとにし

てこの割合と交換の確実さが確立されたところのシーニュの総量が決して減少しないことがきわめて重要である」 ([1], II, p. 61)。彼は貨幣量の多少は交換関係に対して中立的であるといいながら、いったん定まった貨幣総額と財総量との比例関係が貨幣量の減少によって動揺してはならないというのである。このように彼は論理整合性を十分に考慮せずに、いくつかの貨幣論を単純に接ぎ木しようとして矛盾に陥ったが、ただフォルボネの力点は、過小生産の状況にある相対的後進国の立場から、とくにヒュームの連続的影響説を敷衍して、購買力としての貨幣量の増減が、直接にかつ波及的に生産過程にどれほど重大な影響を及ぼしうるかを明らかにすることに向けられていた。

流通貨幣量の減少は貨幣の退蔵と貨幣の国外流出によって生じうる。このうち退蔵について、フォルボネは投資のために貨幣がしばらく手元にとどめ置かれる場合と、上にみたような不信用による予備的需要の増大によって退蔵される場合とを明確に区別している。前者の場合には退蔵された貨幣はやがて貸付資本として流通の場に復帰するから(貯蓄=投資)、取引需要に応じてただちに流通に投じられる部分と投資のために退蔵される部分とのバランスが問題になるにすぎない。すなわち後者のために前者が不足することがなければそれでよいのである(「これらの2つの機能の釣合が、このような調和の状態にあるかぎり、つまりどちらの機能も妨げられることも遅滞もなく発揮されるかぎり、すべては繁栄する」 [2], I, p. 110)。不信用による退蔵についても、信用が回復すれば退蔵された貨幣はおのずから流通の場に戻るであろう。このような退蔵に比べて、貨幣の国外流出ははるかに深刻な影響を与えうると考えられている。貨幣の流出は購買力の喪失に等しく、これによって「買い手の数が永遠に減って」しまう、国内消費の減少は失業者を生みだし、彼らを国外へ追いやり、これによる人口の減少はさらに生産と消費とを減少させるのである ([1], II, p. 61)。また彼は貨幣量の減少の影響を次のようにも論じている。流通貨幣量の減少は支払い手段を減少させ、貸付ファンドを減少させる、貸金は下方硬直的であるから(彼はなぜそうなのかについては述べていない)、貸付ファンドの減少は雇用を減少させ、したがって消費を減少させるから生産を縮小させる、生産の縮小は高価をもたらす、高価は賃金を引き上げるから、結果として最も必要な労働者しか

雇用されなくなり、失業者がさらに増大して生産の縮小に拍車がかかる。こうして彼は貨幣量が多と少ないのと、それが減少するのでは「かなり異なる状態が現れる」とするのである ([2], I, pp. 129-130)。

貨幣量の増加はこの裏返しであり、経済に対してアクティブな影響を及ぼしうる。流通貨幣量の増加は鉱山と外国貿易とによって生じうるが、このうち鉱山の所有からもたらされる貨幣は少数の人々の「支出能力」を高めるにすぎず、最も有用でない物産の価格を高めるだけであり、「有用かつ必要な物産の労働によって就業している人々」には無縁である。これに対して、貿易バランスの順調による新たな貨幣の流入は「あらゆる種類の物産、あらゆる階層の人々を巻き込む」からきわめて有効である。なぜなら、ある物産の消費の増加は価格を上昇させ、人々の利欲心を駆り立ててその物産の生産を刺激してこれを増加させるが、これとともに「幸福な連鎖」によって消費水準が全般にわたって波及的に上昇し、インダストリー全般を刺激するからである(「国家に有用なあらゆる階層の人々、すなわちあらゆる就労者に行き渡るまでにその利益は繰り返されていく」)。貨幣量の増加は「最終的には」物価上昇を引き起こすが、そこに至る前の段階で「この新たな貨幣量は必ずや……インダストリーを刺激する」のである。彼はこれによって不信用の動機そのものが消滅するから、「古い貨幣の所有者たちはもっと自由にそれをばらまき、流通はその自然的秩序に近づく」とさえ述べている ([1], II, pp. 62-66)。この点でフォルボネがヒュームの連続的影響説を基本的にそのまま引き継いでいることは明らかである。しかしながら、一方でヒュームが貨幣量の自動調節に着目し、物価の変動による交易条件の変化を通じて長期的には貨幣量はヨーロッパ各国で平準化するとして、この観点から貿易バランス論の無効性を唱えたことに対しては、これを厳しく批判している。

彼はまず貨幣量の増加は高物価をもたらす交易条件を悪化させるとするのは、「もはや改良の余地のない国とその余地のある国との違い」を混同した議論であるとして、改良の余地が多くある国ほど、貨幣量の増加による需要増は競争を激化させ、より大きな生産効果を発揮するから、貨幣量の増加は比例的な物価上昇をもたらすものではないことに注意を喚起する(またこのときには貸付資本に対する潜在的需要も大きいから、貨幣量が増加しても金利が下

がるとはかぎらない)。フォルボネは連続的影響説の理論的妥当性が過小生産を前提にして初めて生じうることを明確に示すとともに、労働力や土地の過小使用の程度が大きいほど生産効果も大きいから、この場合には貨幣量の増加による物価上昇はかなり緩和され、ただちに交易条件の悪化が生じるわけではないと考えるのである ([2], I, pp. 131-135)。フランスの現実が彼の念頭にあったことはいうまでもない。逆に貨幣量が減少に転ずれば、既にみたように人口と生産の減少を通じてただちに「政治体は激しい危機に見舞われる」([1], II, p. 70) ことになる。これによって生産基盤が破壊されれば、貨幣量の減少による物価下落によって交易条件が有利に転じたとしても、生産力の回復は容易ではないであろう。フォルボネにとっては、貨幣量の増加による最終的な高物価の結末は、貨幣量の自動調節によるその平準化などでは決してなかったのである。

また自動調節機能論は世界経済の現実を無視している点でも空論に等しいとされる。彼はいう、各国はお互いに日常的に不信感を抱き合い、その結果として必要品の自給体制を整えながら人工的富（貨幣）の獲得を目指してしのぎを削っている、この相互不信の強さは、ときとして「嫉妬」に変わり、行きすぎた対抗関係を導いて平和を乱すことがあるほどである、ヨーロッパ各国で生産力が最高水準に達し、かつ貨幣の存在量が世界的に一定であれば、「金属はいたるところで各国で生産される物産の数量に応じた正当な比率で分配されるに違いない」から、(ヒュームがいうように) 嫉妬や対抗心は無用というべきであるが、しかしどの国もいまだ最高の生産力水準には達しておらず、しかもその可能な最高水準と現実の水準との隔たりの程度は各国で異なっている、それゆえ相対的により多くの貨幣を所持して優位に立つ国もあれば、そうでない国もある、さらには貨幣の存在量も一定ではなく、スペインとポルトガルから年々新たに供給されており、このことが自然的秩序(比例的均衡)への回帰の障害となって、各国は相互不信のなかで競争心を発揮してこの貨幣の獲得を競い合い、ときとして「行きすぎた嫉妬」にまで至るのである ([2], I, pp. 115-117)。さらにはそもそも生産力の全面開花の果てに過度の高物価ゆえに最終的に外国貿易が停止しうるのは、「何世紀にもわたって貨幣を引き寄せる権利を争った」([1] II, p. 74) あとのことにはすぎなかった。それゆえ、戦争にまで至るような行き過ぎは不正であ

るにしても、国家間の生産力競争において有利を得るために「経済の諸原理はアメリカの鉱山が閉じられるか掘り尽くされるまでは……貨幣が勢力の真の原動力であるヨーロッパの現実の情勢に立脚しなければならない」([2], I, pp. 118-9) ののである。

フォルボネは、このように過小生産、生産力水準の不均等、ヨーロッパ各国の対抗的關係、貨幣の存在量の持続的増加などの現実の諸事情をあげて、自動調節機能論の非現実性を批判し、貨幣が積極的機能を果たしうる局面は当分の間は続きうるとして、貿易バランス論の有効性を論証しようとしたのである。この脈絡においては連続的影響説はもはや物価上昇までの中間的段階というにはあまりに長期の(「何世紀にもわたる」) 時間的スパンを通じて有効であると考えられており、このかぎりでは数量説の世界ははるか遠くに霞んでいる。

ところでムロンやとくにデュトは、ヒュームとは異なって、個人的信用であれ公信用であれ、信用の鑄貨との代替可能性あるいは信用による通貨量の操作可能性に着目することで貿易バランス論の意義を相対化した。これについてもフォルボネは彼らほどは信用の意義を認めなかった。商業手形や為替手形などの個人的な信用手段は、鑄貨の代替機能を果たすことで物資の流通を容易にし、それゆえ消費を増大するという大きなメリットを有するが、公信用はそれを「信用する臣民の世評においてしか国家を豊かにするものではなく、……これらのシーニュは対外的な関係においては何の役にも立たない」([1], II, p. 81) とされる。公債については、国民の税負担を重くする一方で寄生的な金利生活者を生みだし、公債への投資の増大は他の職業から資本と人材を流出させ、これによる金利の上昇はいわゆる押し出し効果を招いて農業と商業に打撃を与え、高金利を目当てにした外国人の投資を増大させる、さらに公債が通貨として流通すればそれだけ物価が上昇することにもなる。彼はこのように述べてムロンとは逆に、また『政治論集』のヒュームに同調して公債を否定的に評価している ([1], II, pp. 118-121)。銀行信用についてもその評価は消極的であり、「流通紙幣の数を制限することができれば、……それらは政治体のすべての成員が一般的枯渇の状態に陥っている場合には非常に有効である」([1], II, p. 100) とするものの、「以上のような推論から、流通と信用が着実な活動を行っているところでも銀行は無用であり、危険でさえあると結論づけ

ることができる」([1], II, p. 128), と述べている。彼は不信用の原因として、増価と減価による貨幣価値の変動によって生じる不信用, 独占会社の株価の下落から生じる不信用, 公債の償還の不確実さによって生じる不信用をあげ, これらによって一般的な不信用が生じると, 貨幣の予備的需要が増大し貨幣が流通の場から引きあげられて, 資本とインダストリーが国外に流出する次第を詳しく分析しているが, このような公信用に基づく信用経済の脆弱性に対する懸念のゆえに, 彼はムロンやデュトのように公信用を積極的に推奨することを躊躇せざるをえないのである⁽³⁾。

以上によって, われわれはヒュームの批判や, ムロンやデュトの信用論の展開にもかかわらず, フォルボネにとって貿易バランス論がどのような現実的意義を持っていたかを知ることができる。彼はインダストリーの立ち後れと過小生産というフランスの置かれた状況を前提に, 連続的影響説にも立脚しつつ, 対抗的な国際関係のなかで貿易バランスの有利を維持することが, 当分の間は産業政策や貿易政策の指標とならなければならないと考えたのである。

(注)(1) ただしこれは『商業要論』での呼び方であって, 彼は『原理と考察』では物々交換の「単純流通」に対して, 貨幣に媒介される流通全般を「複合流通」と呼び, そこでの貨幣の機能を表徴の機能と不動産の機能とに区別している。

(2) ほかも彼は「消費が増えれば貨幣の量が増えなくても金利は自然と下がる」([1], II, p. 68)と述べて, 消費水準と貨幣供給量とを明確に区別している。

(3) 彼はムロン=デュト論争については, ムロンの増価肯定論や債務者保護論に対するデュトの批判を支持し, 「貨幣をそのままにしておくことが重要である」([1], II, p. 103)と述べているが, デュトの公信用論については何も言及していない。

(3) 外国貿易論

既に述べたように, 国内における相互依存の関係は対外的な貿易関係と密接にリンクしており, 外国貿易のあり方に大きく規定されていた。例えば, 国産品と競合する外国産製品の輸入は, 国産品の消費を阻害し, その生産に従事する労働者から賃金の価値を奪うばかりか, 国産品の原料が実現しえなはずの価値をも奪う。したがって「これらすべての価値の流通による利益, すなわち消費を通じてその他の様々な臣民に及んだはずの安楽さと……君主が臣

民の安楽さから期待すべき財源」を奪ってしまう([1], I, pp. 29-30)。このように国産品と競合する外国産製品の輸入は, 国内の相互依存関係に深刻な影響を与えているのである。国内製造業ないしインダストリーは, 販路の相互性に基づく相互依存の観点からも, また「欲求の体系」において人々が消費欲求の充足水準を高めていく上からもきわめて重要な役割を担っている(そのことは彼の重農主義批判の基本的な立脚点となっていた)。彼は『原理と考察』において, とくにフランスの現実を踏まえて, 「土地の生産の労働に対して過剰な人間がいて, 耕作すべき土地がまだ残っている」ような場合には, 農業生産における余剰人口を「労働力の仕事」に吸収することで彼らを救済するとともに, 彼らの需要によって農業における過小生産を解消することができるとして, マニュファクチュールを復興させたコルベールの功績を高く評価し, 重農主義者によるコルベール批判に反論している。このことから国産の製造品の輸出が有利なことは明らかである。国産の製造品の販路を国外にみい出すことができれば, そうでない場合に比べて「自然的な割合」を超える過剰人口を維持することさえできると彼はいう。すなわち, 製造品の輸出の見返りに土地所有者の嗜好を満たしうる国内では産しない奢侈的な土地生産物が外国や植民地から輸入されることで, 輸出製造品の生産者は土地所有者の持つ余剰を交換に手に入れることができるし, 他方ではこのような等価物の提供は所有者の生産意欲を刺激するから, 農業生産をさらに拡大することができるのである([2], I, pp. 63-68)。

フォルボネは, ボワギルベールやケネーと同じく, フランスは住民を十分に養いうる豊かな潜在的な農業生産力を持っていることを前提にしたから, 製品輸出の見返りに食料輸入を求めることはしない。「住民の食料を満たす国」では, 「労働力の物産」の輸出の見返りに手に入れるものは, みたように土地所有者たちの嗜好や享楽の対象となる外国の土地生産物のほかにはない。この点では国内における土地の完全利用を前提にしながら, 製品輸出(=雇用の増大)と食料の輸入によって, さらに就労人口を増加し国民的富裕を増大しようとしたカンティロンの論理とは異なっている。ただし彼はここで土地生産物の輸出の是非については明らかにカンティロンの議論をそのまま踏襲し, 何の留保もなく, それは人口を減少させるがゆえに一般に不利であると

している（「もしこの国が労働力の物産と交換に3千万アルパンの生産物を国外で消費するならば、維持することのできたはずの125万もの家族が減少してしまうだろう」〔2〕, I, p. 66）。このかぎりでは、彼もまたムロンと同様の矛盾に陥っているといわなければならない。なぜなら彼は前にみたようにとくに『商業要論』では、ボワギルベールと同じく、穀物の供給過剰によって穀物の低価格による過小生産が生じることを懸念して、穀物を「中庸な価格」に維持するために穀物輸出の自由化を唱えていたし、また穀物輸出によって農業者の雇用が確保されるメリットにさえも論及していたからである。この矛盾は、国内の土地の完全利用を前提にしたカンティロンの就労人口論および貿易論を無自覚に持ち込んだことの結果であり、またこのことは一面でフォルボネが『原理と考察』の段階にあっても、なお多人口主義の呪縛に囚われていたことを示すものである。

他方で世界経済は、既に述べたように「進歩の不均等性」〔1〕, I, p. 147)のゆえに、各国が「疑心暗鬼」と「嫉妬」に駆られつつ生産力競争にしのぎを削る過酷な状況にある。繰り返していえば、「隣り合うあらゆる社会が不断にかつ相互に疑心暗鬼の状態にあるとき、人間の数と雇用の、また土地と生産物の質の優位は彼らの嫉妬をかきたてるのに十分」なのである。そこでは他国の自然的有利に対抗するために、みずからの嗜好や必要でさえもときに抑制されるほどである。これがフォルボネのみた「現実」である。各国が「この傾向の確実な結果として」、他国以上に実質的富（輸出可能な余剰）と相対的富（協約の富）を獲得しようと懸命になる理由もそこにある。この意味で、他国民の利益と自国の利益との対立の可能性に目を向けないコスモポリタンたちは、事実を無視した空論家にすぎないとされる。フォルボネはここで重農主義のコスモポリタニズムに直接の批判の矛先を向けているが、矛先は同時に、各国が自然的有利さを活かすことで相互利益が可能であるなどと、素朴な国際分業論を展開したヒュームへも向けられていたように思われる。フォルボネにとっては、そのような「崇高な理想」の実現を期待するのは「千年王国という謬論が実現される」のを待つに等しい〔2〕, I, pp. 53-4)。とりわけ彼にとっては、インダストリーの「進歩の不均等性」を無視している点で、ヒュームの議論は受け入れがたい空論にすぎなかったに違いない。以上のようなフォルボネの徹底したリアリズムの背景

に、イギリスとの生産力競争においてフランスが劣勢にあるという強烈な自覚があったことはいうまでもない。この自覚はまた、世界の富の存在量をほぼ一定であるとみて、自国の利得は他国の損失とみなした重商主義の固定観念によって支えられていた。

彼は富のおもな原因を就労人口に求めたから、それゆえこの固定観念は1つには労働バランス論として表されることになる。イギリスにおける穀物の輸出は「他国民を犠牲にして90万の人々を養い、就業させたであろう。イギリスが毎年、外国人に対してこのような販売を行うとすれば、買い手の間では90万の人々がまずもって生活資料をみいだすのがより困難となり、結局、生活資料に不足して、みずからを養うる国に移住せざるをえなくなることは明らかである」〔1〕, I, pp. 69-70)。さらに彼は、富の生産と労働の水準の規定要因を消費需要にみる視点からいわば消費バランス論を展開し、「2国間での産業労働の進歩の優位はその国の国内消費と対外的消費の優位次第である」として、「外国人の産業労働の成果」の消費をできるだけ少なくし、一方で国産品の対外的消費をできるだけ獲得しなければならないと述べている。他国の消費を獲得するためには、国内消費の場合と同様に製品の品質は問題ではない、「あらゆる階層の消費者の嗜好を得る」ことが重要であり、他国の消費事情に応じて多様な製品が提供されねばならない。国内消費においては職人たちの原理であるものが、対外的消費においては「国家の原理」となり、こうして立法者は在外公館を設置して外国での消費者のニーズを探るなど、相手国の消費者の嗜好や気紛れに配慮する「商人にすぎなく」なる〔1〕, I, pp. 151-2)。ここには国産品の対外的消費の増大は他国の消費と雇用を減少させて、その国の農工バランスを攪乱する一方で、自国の雇用を増大させて生産力の拡大を可能にするという因果連鎖が想定されており、消費バランス論は労働バランス論と裏腹の関係にある。そしてこれらの2つのバランス論は先にみた貨幣論と結合され、貿易バランス論として集約される。貿易バランスの順調は労働バランスや消費バランスにおける優位を、すなわち消費と雇用の相対的増加を表現するとともに、これによる貨幣の流入は直接に購買力を増加し、連続的、波及的な生産効果を発揮して生産力の拡大を加速するのである。

このようにフォルボネはムロン以上に貿易バランスの重要性を強調するが、しかし彼の貿易バランス

論はコルベルティズムのそれと同列のものであったわけではない。貿易バランスが有利に傾くかどうかは、必要品の自給体制を整えつつ輸出可能な余剰の生産によって対外的消費をどれほど獲得しうるにかかかっており、相対的富の獲得は実質的富の生産の結果であり、貨幣の獲得はあくまで生産と就労人口の最大化という目的のための手段にすぎなかったからである。むしろわれわれはこのような立論の仕方に、労働の潤沢による富裕化の論理と貨幣理論とを結合し、これらを貿易バランス論に集約したカンティロンと同じ方向性をみることができる。貿易バランスの順調を求めながらも、大量の貨幣が一度に流通して過度の高物価を招いてはならないとして、このための配慮（貨幣政策）を求めた点も同じである（[1], II, p. 75)⁽¹⁾。ただフォルボネはカンティロンのブリオニズムの側面は共有しなかったし、何よりフォルボネの立脚点はカンティロンのそれとは異なっていた。フォルボネにとっては産業政策や貿易政策の目標は、カンティロンとは異なって、過小生産の解消と対抗的な生産力体系の樹立にあり、貿易バランスの有利はその結果にすぎなかったからである。

このような目標の実現のために彼が唱えたのが、自由と保護の両面政策であった。既に述べたように、国内における相互依存のシステムを順調に維持するためには土地生産物の「中庸な価格」と製造品の安価が求められ、このために物資の自由流通や就労や製造の自由を実現しなければならなかった。しかしながら、みてきたような世界経済の現況を前提にするかぎり、このような自由と競争の原理を対外的関係にまで敷衍することは到底できない。彼はいう、「その国が植民地や漁師をもっていれば、また自国の土地の生産物であれ産業労働の生産物であれ、輸出すべき生産物の余剰を大量に持っておれば、これらを維持することがその国の政治的利益の主要な部分となる。これによってその国が利得する分は全体として、ライバル諸国の実質的かつ相対的な勢力を減じ、逆にその国が失う分だけライバル諸国の勢力が増大する。これらの重要な利益に鑑みて、必然的に国家はこれらの力の唯一の支えである産業を保護するとともに、敵国の産業を攪乱し、あるいは破滅させさせすために、莫大な費用をかけて海軍力を維持しなければならない」（[1], I, p. 208）。神慮は相互依存を強いることで人間に平和と相互扶助の関係を求めたとする当初の議論は、この

ような強烈な対抗意識の前に完全に消え失せてしまう。こうして自由は「社会の一般的利益が許す」範囲内に制限されねばならない（[1], I, p. 48）。フォルボネは、国内産業が十分な対外的競争力を身につけることができるように、輸出助成金、排他的特権の例外的認可、関税政策などによるその保護育成の必要性を強調し、こうして対外的観点に立って産業保護主義を唱えるのである。以上のような、産業保護のために自由の規制を求めるフォルボネの「自由と保護」の論理は、競争条件の平等化のために外圧に抗して航海条例という「城壁」を設ける一方で、国内的にはレセ・フェールの原則を押し進めようとしたグルネの論理とはズレており、むしろムロンの規制的側面を生産力視点と対抗的視点の2重の視点から敷衍したものであったといえる。また強烈な対抗意識にもかかわらず、保護の手段としてフォルボネが唱えたのは、「城壁」どころか緩やかな対抗措置であった。彼がいうには、「今日ではあらゆる国民が貿易の利益について十分に開明的であり、一国だけが敢えて厳格な措置をとることはできない」（[1], I, p. 195）から、政府の介入は産業の自立を側面から支援するための緩やかな措置にとどめざるをえないというのである。強い対抗措置は他国の報復を招くから、これにより結局双方とも自滅してしまうであろう。この意味で他国の恨みを買うことの少ない助成金制度が最も有効であるとされる（[1], I, p. 199）。またこのような保護措置は一時的なものにとどめるべきであり、自立が可能になれば、ただちに競争原理の見地から撤廃されねばならない。例えば穀物の輸出奨励金なども競争相手国の穀物価格の動向次第では廃止されるべきであるし（[1], I, p. 72）、植民地産の農産物への助成金も、それがなければ立ちゆかない間の暫定的なものにとどめられねばならないのである（[1], I, p. 232-3)⁽²⁾。

以上みてきたように、フォルボネはボワギルベール、ムロン、ヒューム、そしてグルネなどの議論を組み込みながら、独自の生産力理論を築き上げようとした。シュンペーターはフォルボネを「何の独創力もない折衷主義者」と評したが⁽³⁾、確かにその体系は論理整合性の点でいくつかの綻びが顕著であったし、理論的なオリジナリティは希薄である。しかしながら、生産力競争において劣勢に陥っていると強い自覚の下に、彼らの議論を目前のフランスの現実に照らして、その妥当性を疑い、あるいは敷衍しようとする彼の「自由と保護の経済学」は、ムロ

ンが切り開いた現実接近の仕方をさらに押し進めるものであり、ケネーへと至る系譜とは異なる展開のあり方がどのようなものであったかをよく示している。さらにフォルボネは「欲求の体系」の構想に、マンデヴィルやムロンの奢侈論を一般化した「国民の奢侈」の視点を重ね合わせ、それにみずからの生産力理論を結合して独自の社会観を紡ぎだした。それはムロンやモンテスキューの社会観に一段の飛躍をもたらすものであり、同時にケネーの形而上学的体系の非現実性を暴こうとするフォルボネの立脚点でもあった。次にわれわれは彼の奢侈論と重農主義批判を概観し、彼の経済学ないしそこに示されたビジョンの全体的な特質を浮き彫りにすることで、その歴史的意義を明らかにしよう。

(注)(1) カンティロンの『商業試論』(*Essai sur la nature du commerce en générale*, 1755)の執筆時期は1730年頃と推定され、その出版にグルネが関与したことはほぼ確実だと考えられている(津田[1992]を参照)。少なくともグルネは出版前の草稿を利用することができた(Tsuda [1983], pp. 480-481)。『原理と考察』におけるカンティロンの影響は明らかであるが、グルネの周辺にいたフォルボネが『商業要論』(1754年)の執筆段階でいち早くこの草稿に触れる機会を持ったこともまた十分にあり得たであろう。いずれにせよ『商業要論』にカンティロンと類似した議論がいくつか散見されることは確かである。

(2) 同様に彼は製造品の輸入関税についても15パーセントを上限にすべきだとし、それ以上を要求する国内の業者は儲けすぎているか、事業の経営の仕方がまずいと断じている([1], I, pp. 150-1)。

(3) Schumpeter [1954], p. 174/第1巻362ページ。

3. フォルボネの奢侈論と重農主義批判

(1) 奢侈論

フォルボネはムロンと同じく功利主義的な人間観に立脚して、奢侈を「余分な支出」とみてこれを非難することは、実質的平等を求めて人々を物理的必要のレベルに押し込めてしまうに等しいが、人間の情念にそのような物理的必要性に限られた質素な暮らしを甘受させることは「絶対に不可能である」と断じる⁽¹⁾。もともとこの「余分な支出」の大部分は、その動機が自己保存をより確実にするための「余分な便宜」を求めることにあるが、「自然の虚栄心や享楽への傾きにより、余分な便宜に無関心であるこ

とは一般にありえない」のである。ここにフォルボネは「物理的な必要」と「奢侈」との間に「便宜」の一領域を設けて、奢侈か必要かという不毛な二者択一の議論を退けようとする(「自己保存をより確実にする様々な便宜は、物理的な必要と奢侈との間に自然が設けた一段階だと私には思える」)。マンデヴィルやムロンが「奢侈」や「必要」の観念の相対性に着目して、絶対的な奢侈批判が根拠を持たないことを指摘したにすぎなかったのに対して、フォルボネはこのような工夫によって、奢侈を自己保存にかかわる便宜とそれを超える部分に区別し、前者を奢侈批判の対象から救いだそうとするのである。ただし、彼がいうには「一般にみられる趣味の多様性」から明らかかなように便宜の領域は広大であり、一方で「余分な便宜とはその利用に関して相対的な必要以外の何ものでもない」し、他方で便宜と奢侈との境界も曖昧である。それゆえ、結局「奢侈の観念は比較の問題にすぎない」ことになり、この意味で奢侈はほとんどその実体を失って、境遇の改善のために「余分な便宜」あるいは「快適な便宜」を求めること、すなわちたんに消費水準の向上を求めることと同義にすぎなくなる([1], II, pp. 134-7)。こうして彼はいう、「可能なかぎり明確に、奢侈を、他人の労働によって快適に生活する能力を人間が行使用することであると定義すべきであるように思われる」([1], II, pp. 136-7)。

このようにフォルボネは奢侈の観念を広大な「便宜」の領域に解消してその定義を無化するとともに、奢侈的衝動に含まれる顕示性などの非合理的要素をできるだけ排除し、奢侈を境遇の改善欲求という、いわば経済合理性の枠内に取り込もうとするのである。このような姿勢が奢侈を事実上「洗練」とみたムロンやヒュームの視点を踏襲するものであることは明らかである。ヒュームは奢侈を道徳的に有害な奢侈と無害な奢侈とに区別し、道徳的に無害な奢侈はアートとインダストリーの洗練をもたらし、かえって人々を有徳にするから社会的に有益であるとしたが、フォルボネもまた「奢侈は人間を教化し、その礼儀を洗練し、気質を和らげ、想像力を磨き、知識を完全なものにする」として、続いてヒュームの言説をそのまま引用している([1], II, pp. 141-2)。こうして奢侈は人間の徳性の腐敗を招くどころか、人間の眠っていた才能を目覚めさせ、洗練を導く原動力であったから、道徳的な奢侈批判は的外れであるばかりか、奢侈の社会的効用に目を

つむり、奢侈が社会的結合や社会の繁栄の原動力であることを無視するものであった（「奢侈を非難する人々の主義主張は常に人間の情念、競争心、社会の魂や絆と相容れないであろう」〔1〕, II, pp. 137）。彼はいう、「金銭欲が職人たちにどのような飛躍を与えないものだろうか、利得の魅力が数多くあるときには彼らの競争はもはや個々の階層にかぎられない、利得の魅力が人々にもたらす熱意や信頼は広く行き渡る。人々のお互いの安楽さが、お互いの眼差しによって彼らを刺激しあう、彼らに共通の自負心が社会の繁栄の象徴なのである」〔1〕, II, p. 67）。あるいは「余分な便宜」の生産者は、その価値の実現によりこれまで持たなかった「有用な便宜」を与えられるから、「金持ちが楽しみを増やすほど、これらの貧民は以前の生活状態と比べれば奢侈的となる。彼らはこれによって望んでいたものの一部を享受することになるから以前よりも幸福となる、現状で満足できる人はほとんどいないから、このような満たされない思いや野心がインダストリーの努力を倍加し、貧民のための職業の種類や社会の幸福と力を不断に増加させる」のである。安楽や境遇の改善を求める人間の利己的情念こそが労働のインセンティブないしモチベーションであり、これがインダストリーの発展を主体的に導いていくとともに、他方でこの奢侈的欲求は消費需要に転じて人々に雇用を与え、インダストリーの展開を規定する客体的な要因となりうるのである。したがって、「社会において奢侈が制限されているか、もしくは減少の傾向にあれば、社会は土地の労働や、許された便宜または現在用いられている便宜の労働に必要な数の労働者しか持たなくなる」。

ところで、「満たされない思いや野心」は「お互いの眼差し」によって増幅され、お互いの競争心がさらに人々をインダストリーへと駆り立てるのであるが、奢侈の進歩に応じて市民の間で目覚めるこのような競争心の動機は、他の人々と同じように豊かで幸福だとみなされたいという「世評の平等」への願望にあると彼はいう。それゆえ「立法者は、いつも目の前から遠ざかって、いたずらに願望を掻き立てるにすぎないこのみせかけの誘惑物を一般にあらゆる市民に勧めること以上に賢明な施策を何もし得ない。国家の力と繁栄は、このような幻想を掻き立てる人がどれほどいるかにかかっている」ほどである（〔1〕, II, pp. 136-8）。「世評の平等」が幻想にすぎないのは、実質的な不平等が不可避だからであ

る。彼はしかし不平等それ自体は、技術力や能力に応じて報酬の格差を承認する「密かな、あるいは慣例的な公正さ」を損なわないかぎり妥当であると考え。したがって商人の財産がどれほど莫大なものであったとしても、それが彼の経営努力や能力の成果であるかぎりは、「それによって生存が保証される何千もの家族にいかなる嫉妬も起こさせない」（〔1〕, II, pp. 139）。しかもフォルボネは、このような不平等は決して固定的ではなく、機会の平等を通じて常に流動的であると考えた（「法が実質的に平等にしている市民相互の間での無数の手段を通じて、この不平等はわずかの時間に変化するに違いない」〔1〕, II, pp. 134）。それゆえ「この分配が繰り返されるにつれて、農業者や職人はより多くの快適な便宜を知るようになり、その便宜の利用によってそのほかの無数の人々も同じ能力を高める。各階層において彼らの間になお残る不平等が彼らを意気阻喪させることはない。なぜなら、不平等の原因は明らかであり、だれにも手の届くところにあるからである。すなわちそれはインダストリーである」（〔1〕, II, pp. 138-9）。「世評の平等」が実現されることは「永遠に」ありえないが、しかし欲求の充足を目指して勤労に励む者はだれでもその情念を満たし、同時にそれによって階級間の不平等を流動化しうる。国民的富裕はこのようなダイナミックな過程を伴いつつ全体として増進されていくのである。

われわれはここに身分制秩序の流動化を恐れて、「商業の精神」の全面展開を許容しえなかったモンテスキューとの鮮やかな対照をみることができる。モンテスキューは政治的秩序の観点から諸身分の質的差違を維持しようとして、商業活動による奢侈を人民にのみ許し、さらには富を売官制を利用して高位の身分に伴う「名誉」を手に入れる手段と捉えて、富裕な市民層の活動のインセンティブをそのような社会的上昇の可能性に求めたが、フォルボネにとっては、奢侈的欲求の充足は意欲と勤労次第でだれにも開かれていたし、また社会的上昇に伴う「名誉」は、富を獲得しこれを顕示したいという欲求ほどは勤労のインセンティブとはなりえなかった（「このような様々な程度の実質的不平等と結びついた名誉は、富を獲得しあるいはそれを顕示する必要性ほどには人々を職に就けないように思える」〔1〕, II, p. 143）⁽²⁾。さらにわれわれはここに、フォルボネと同じく諸身分の質的差違を経済的機能における量的差違に解消しながら、再生産秩序における3階

級構成を不動のものとしたケネーとの違いをもみることができよう。フォルボネにとっては、人々が意欲と勤労に応じて不平等を流動化する可能性こそが、ムロンやモンテスキューのいう「商業の時代」の際だった特徴であり、むしろ経済のダイナミズムを導いて国民的富裕を実現しうる原動力であったのである。

こうして奢侈の主體的、客體的な2重の経済的機能はだれにも期待される。「国民の奢侈は常により一般的なものとなる。商業は個人を権力の手本によりそのように強いるというよりは、むしろ彼らの能力の増加により彼らを支出へと導く」([1], II, pp. 139-140)。カンティロンがいうように人々は君主や地主の手本に倣ってみずからの消費を行うのではなくて、内外商業の発展とともに国民の購買力が増加し、人々がみずからの消費欲求を満たそうと支出を増やしていくことで、奢侈が一般化していくのである。このような「国民の奢侈」の視点が、既にみた大衆消費論によって支えられていることは明らかである。販路の相互性に支えられた相互依存のシステムは、就労者大衆の消費購買力の増大によって拡大再生産されていくが、このことは彼らの奢侈的欲求の2重の機能を通じて実現されるのである。フォルボネは奢侈論を大衆消費論と結合することで、マンデヴィルやムロンのいう奢侈の経済的機能を一般化し、「国民の奢侈」の視点を切り開いたといえよう。またこれによって、17世紀以来の価値観の世俗化の流れのなかで醸成されてきた、社会的結合の原因を欲求や効用の相互性にみる「欲求の体系」の構想は、はじめてみずから貫徹させうる論理を手に入れたことになる。ボワギルベールやマンデヴィルは、一方で労働者の境遇の改善は有害であるとする伝統的な労働者観ないし低賃金論に囚われて「欲求の体系」の構想を貫くことができなかつたし、ムロンは消費欲求とインダストリーの2つの動因を一体のものとして捉えきれず、それゆえ明示的には富者の奢侈の効用を称揚したにすぎなかつた。これらに対して、フォルボネの「国民の奢侈」の視点においては、マンデヴィルにみられた労働貧民(生産者)と富者(消費者)との分裂はあり得ないし、ムロンの不徹底さもない。フォルボネは、人々の見果てぬ幻想に駆り立てられて進展する「相互的欲求」の体系としての商業社会の一本質を見事に抉りだしたのである。

それでは、このような視点から彼は富者の奢侈を

どのように捉えたであろうか。農業者の奢侈が有力な土地所有者の奢侈と不可分であるように、富者の奢侈もまた国民の奢侈の結果であり、商業の発展によって奢侈が一般化しなければ富者の奢侈も本来ありえない。したがって商業の発展を阻害しうるような富者の奢侈は自己矛盾というべきであるし、「国民の安楽」つまり「国民の奢侈」を目指す商業の目的に反する。フォルボネはこの意味で「商業とは無関係の奢侈」を「過度の奢侈」として批判する。それは人々にあまり仕事を与えることもないし、しかも家僕などの「無用な職業」を過度に増やすにすぎない、さらに野心と虚栄心から過度の贅沢が普及すれば、子供の扶養がおろそかになり、人口減少の原因ともなるからである([1], II, pp. 143-4)。このような過度の奢侈により、「流通の自然的秩序が覆され、諸階層間の均衡が破壊され、最も幸いの少ない人々は見捨てられてしまう」。このとき奢侈の「有益な効果は一部の人々だけに感じられるにすぎなくなり、……大きな害悪が生じうるであろう」([1], II, pp. 142-3)とされる。この点で彼はおそらくはマンデヴィルを念頭に置いて、虚栄心などに基づく過度の奢侈をも容認する奢侈擁護論を「奇妙な逆説」であると批判している。ただしこのような批判は不徹底なものとならざるをえない。彼は他方では能力以上に支出して破滅する者がいるとしても、これによって富は持ち主を変えるだけで、むしろ富の分配の平等化に貢献するから「彼らの乱脈振りは国家には何でもない」としているし、また何よりマンデヴィルと同じく消費需要(有効需要)の視点から、過度であっても富者が支出をやめてしまうことを恐れざるをえないからである。「あらゆる誤りのなかでも最たるものは、金持ちが支出しないことである。そうなれば、彼らの周辺ですべての人々が貧しくなり、したがって国家は熱気も活力もほとんど失ってしまうだろう」([1], II, p. 144)。『原理と考察』では、彼はこの視点を押し進め、「自然的秩序に反する悪しき原因から生じる正常でない奢侈」を、高利や重税など「他人の資産の強制的な移動」によって得られた収入に基づく奢侈に限定し、そのような奢侈でないかぎり、「われわれは消費はその源泉が何であれ、それ自体は有益かつ必要であると断言する」と述べている([2], II, p. 291)。ここでは「過度の奢侈」批判というよりは、むしろ「所有の自由」に立脚した「消費の自由」の側面が強調されている。

このように富者の奢侈について彼のいうところは必ずしも一定していないが、ただ「労働の増加による大衆の安楽が生み出す奢侈は、決して心配するには及ばない」([1], I, p. 58) とされるように、全体として彼の主眼が「国民の安楽」の増進に置かれ、その視線がそのための生産的条件に向けられていたことは確かであろう。すなわち、「能動の人口」に支えられた相互依存のシステムの順調な機能のためには、基本的に奢侈は境遇の改善欲求という合理的な動機に導かれ、かつその奢侈を可能にする収入源は職業間で釣合の取れた妥当な不平等に基づくものでなければならない。しかも前に述べたように、この実質的な不平等は小さいほど生産と消費に有利であった。この点でいえば、フォルボネは不労所得を支出する消費者にすぎない有閑者の存在意義を消極的にしか認めなかったといえよう。

(注)① フォルボネの奢侈論については、筆者の旧稿(米田昇平 [1997])をも参照されたい。奢侈論争史の文脈のなかでフォルボネを論じたものは、筆者の手になるもの以外には見当たらない。

② ただし彼は身分制ヒエラルキーや売官制の廃絶を望んだわけではない。身分や官職に伴う「諸特権は自然に反し、共通の権利に反する」としながら、「しかしそれらは統治の構成によって合法化されており、したがって問題なのはただその行き過ぎを緩和することである」([2], I, p. 44) としているし、また売官制についても、官職の購入が人々の競争心の対象となっている以上、それを廃止するのではなく、それに伴う特権を無効にすることでこの制度を修正することが肝要であるとしている。

(2) 重農主義批判

フォルボネは『原理と考察』において、重農主義の体系をたびたび「形而上学」であると揶揄しているが、以上みてきたような彼の認識はどのような重農主義批判を可能としたであろうか。最後にこの点を概観することで、彼の経済学およびそれが立脚する彼の社会観の特質を改めて浮き彫りにしよう。彼の批判の眼目は、重農主義者がその自然主義的な富観に基づいて、加工品を「不妊の富」とし、「インダストリーの労働は富を増やさない」としたことに対して、相互依存のシステムないし「相互的欲求の体系」におけるインダストリーの重要性を強調するところにある。すなわち 1. 消費水準が生産水準を規定し、インダストリーに従事する人々の農産物需要こそが農業生産の原因であり、2. 真の富裕は生活

の安楽つまり量的、質的に豊かな消費物資の享受にあるから、この意味で国民の安楽を実質的に高めていくのはむしろインダストリーであるとするのであった⁽¹⁾。

フォルボネはまずケネーやミラボーの地主の消費支出の主導性にかかわる議論を徹底的に批判する。彼らは地主が収入を折半して農産物への支出(「生活資料の奢侈」と製造品への支出(「装飾の奢侈」)とを同じ比率で行えば単純再生産となるが、製造品への支出を増やせば前払いは減少して再生産は縮小し、逆に農産物への支出を相対的に増やせば、前払いは増大して再生産は拡大するとしたが、フォルボネは重農主義の原則に即していえばどちらも間違っていると考える。製造品への支出分はそれを受け取る製造品の生産者によって、必ずや農産物の購入に振り向けられるから、製造品への支出が増えたとしても、借地農の手元に間接的に戻る分の割合が高まるにすぎない。彼によれば、製造品への支出が農産物への支出と相対的にどのように増減しようとも、最終的に借地農の元に回帰する貨幣には違いがないから、このことによって前払いが増減して再生産の規模が変化することなどありえないのである。それゆえ「所有者の最大の支出が土地の物産に向けられれば、耕作者たちの手には彼らの前払いや回収を上回る額が入ると考えるのは、まったくの幻想である」。生活資料の奢侈が増大して農産物への直接の支出が相対的に増加すれば、貨幣はより迅速にかつより確実に農業者の手元に戻るというメリットは確かにあるが、しかしそもそもこのような生活資料の奢侈の増大は実際には何を意味しているだろうか。それは地主が物理的な食事の量を増やしたか、家僕などの雇い人や馬や犬を増やしたことの結果でしかないといふ。前者の理由はナンセンスであり、後者の理由は望ましくない。なぜなら家僕はめったに家族を持たないから、これにより能動の人口が減少してしまうからである。こうして「表の著者たちは借地農の利潤の増加および耕作の原前払いと年前払いの増加と、土地の物産への所有者のより直接的な支出とを混同した」のである([2], I, pp. 231-4)。

フォルボネは生産の内在的条件としての原前払いと年前払いの重要性に同意するが、これらが増加するためには「消費が可能で、利益がこうした増加を支えるのに十分でなければならない」([2], I, p. 236)。すなわち農業における前払いの増加は、農産

物需要の増大による価格の上昇によって農業利潤が十分に確保されてはじめて可能であった。ケネーの体系においては、上でみたような購買力の配分の観点から地主の消費支出の主導性に着目した消費主導論と、過剰生産の圧力の下で低水準に置かれた穀物価格を穀物需要の増大によって十分な農業利潤を確保しうる良価の水準まで引き上げることで、前払いと富の増加を実現しようとした消費主導論とが複合しているが、フォルボネはこのうち前者は否定しつつ、後者については基本的にその有効性を承認したといえよう。ただしケネーの場合に後者の消費主導論はフランス農業の過小生産を前提にした動態論のレベルで唱えられたにすぎず、重農主義の体系の論理に導かれて国民の購買力が「支出の秩序」に内部化され、剰余を生産しない不生産階級の経費的支出はその全額がそれを生み出した源泉に回帰するにすぎないものとされるとともに消費の主導性は失われてしまう。フォルボネは前者の消費主導論がこの重農主義の原則に抵触する次第を鋭く衝いたのであったが、この重農主義の原則的立場に対しても、彼は既にみたような販路の相互性の観点からこれを厳しく批判した。すなわち農業生産の原因はおもにインダストリーに従事する生産者大衆の消費であるから（「これらの製造業、この不毛な支出が確かに……再生産を維持するのである」[2], I, p. 234）、したがって地主による製造品への支出が人々に雇用を与え、購買力を与えるならば、むしろ農業生産に有利である。販路がなければ、どのような生産も維持されえないのである。この意味で、彼がいうには、ケネーなどの目論見通りに洗練された技芸が無用なものとなったとすれば、その分だけ農産物への需要が減少するから、彼らが期待するように技芸に向けられていた労働力や資本が農業に向かうことなどありえない（[2], I, p. 253）。フォルボネには、そもそも購買力一定の下でこれが各生産部門の間にどのように配分されるかという問題設定それ自体がナンセンスであった。各部門は均衡的にしか発展しえない。このために必要なことは一般消費水準を高めることであり、そのことは貨幣の漸次的流入と国内外の市場の拡大によってのみ可能であると考えられたのである。

またフォルボネは重農主義の社会ビジョンは人間本性に反しているから、実現不可能であるとみる。「あなたがたはいたるところで哲学的な農業の計画を作る、そこではもっぱら生産に従事する人間はほ

かのかなる情念にも動かされることはないし、単純な欲求しか知らない、そして……その余剰のすべてを新たな生産に向ける。ところでその見方には欠陥がある、なぜならそのようなことは不可能だから」（[2], II, p. 115）。人々の労働意欲を駆り立てるものはかぎりない「享楽の希望」であり、現状に甘んじていられるのは「規則の厳格さによって、骨の折れる、しかも実りのない労苦に献身的に励む修道僧の国民」にすぎない、「強靱な精神に恵まれているというよりはむしろ情熱的な国民のもとでは」、享楽の希望を奪うことによって「競争心を奪うことは、あらゆる厚生を原動力を打ち砕くことである」（[2], I, p. 252）。このようなかぎりない享楽、つまり奢侈的欲求の向かうところは、「単純な必需品」を超えて「便宜品、快適品、装飾品、豪華品へと拡大していく」（[2], I, p. 12）が、これらがインダストリーの産物であることはいうまでもない。富を生まない不妊階級とされる人々の労働の成果こそが「国民の安楽」を実質的に高めていく。この意味で、ケネーやミラボーの再生産秩序ないしそれに立脚した農業社会の構想は、フォルボネにとっては人間本性に反するものであり、それゆえ不可能を求めるに等しかったのである。これに対し、彼はインダストリーが脆弱なために農産物余剰の国内販路に乏しいポーランドの窮状と比較しつつ、イギリスのあり方を高く評価している。「この国は原産物の商業を6, 7倍少なく行い、労働力の商業を土地生産物の商業よりも10倍多く行っているが、われわれはそこにそれに応じてはるかに大勢の活動的な人民の姿と、あらゆる階層の人々が安楽に生活しているのを見いだすであろう、領主たちは自分たちの富は人民のインダストリーによって保証されることを理解し、家僕の階層は公共の収入や国民的生産にとっては失われた階層の人々であると考えることができるほどに、十分に良識的である」（[2], II, p. 118）。

フォルボネは、フランスは他のヨーロッパ諸国に比べて農業生産力に恵まれた「農業国」であることに同意するが、しかしだからといってケネーやミラボーの唱える農業社会論や地主社会論が必然化されるわけではない。功利的人間が相互に結合することでみずからの欲求の充足水準を高めようとするこの「商業社会」にあっては、「国民の安楽」を増進し、享楽ないし境遇の改善を求める人々の利己的情念に応じうる発展のあり方を求めることは、恵まれた農業生産力の上に、むしろインダストリーの発展をは

かること、彼の言葉でいえば産業労働の進歩した「産業社会 (cette société industrielle)」 ([1], I, p. 147)の建設を目指すことにほかならないからである。そのための現実的な諸条件がどこにあるか、言い換えれば「産業労働の進歩」の上で立ち遅れたフランスにおいて、「自由と保護」の両面政策によって対抗的な生産力体系をいかに構築するかという、グルネやグルネ・サークルの人々に共通に課された課題に彼がどのように応えようとしたかは、彼の消費・奢侈論、就労人口論、貨幣論、貿易論などの検討を通じて既に詳しく述べた通りである。

ただ、われわれは彼が生産力の内在的条件としてケネーが着目した資本機能の可能性について、十分には受けとめることができなかつたことに注意する必要がある。重農学派の内部において、ボードーはみたようなケネーの消費論に内在する矛盾を受けとめ、再生産の規模を規定するのは純収入部分からの地主の消費支出のあり方ではなくて、そこからの投資支出の水準のいかんとその投資効率にかかっていると、ケネーの学説を修正して資本理論を進展させたし、またフォルボネと同じく重農主義を批判して「消費の自由」の論理を説いたビュテル・デュモンにしても、その根拠は1つには、ケネーやボードーの資本理論への内在的な批判を通じて、改めて投資誘因としての消費欲求や消費需要の経済的意義に着目したことにあつた。ケネーの資本理論が登場して以降は、生産に対する消費の規定性を一意的に強調する消費主導論はそのままの形では理論的な通用力を失っていくが、フォルボネは『原理と考察』の段階においても、生産力の水準を規定するものはどこまでも消費水準であると考えたから、したがって彼は貨幣の漸次的流入と国内外の販路の拡大によって一般消費水準を高めるか、もしくは素朴に徒食者の就業や他国からの就労者の流入などによって生産力と消費力とをともに体現する就労人口を増加させることで、生産力の拡大を目指すほかなかつたのである。

以上みてきたように、フォルボネはその優れた現実認識によってヒュームの議論の観念性を衝くなど、生産力競争に立ち遅れた立場からの立論がどのようなものであるべきかを示して、ムロンの現実接近の仕方を生産力視点に立ってさらに押し進めた。また彼はボワギルベールやムロンの功利主義的な富観や人間観、あるいは「欲求の体系」の構想に、マデヴィルやムロンの奢侈容認論を一般化した「国

民の奢侈」の視点を重ね合わせることで、人間の世俗的幸福を物質的富の享受による欲求の充足にみる「欲求の論理」を彫琢したが、この側面はフランス経済学に固有の有力な思潮の1つとなつて、コンディヤック、ビュテル・デュモン、グラスランなどによって引き継がれていったとみることができる。フォルボネのこの「欲求の論理」は富や利益を求める人間の心理的動機を照らし出すことで、生産力主義の裏面ないし思想的前提をも明らかにしたが、彼はさらにこの論理と、グルネの生産力主義を批判的に継承したみずからの生産力理論とを結合して、新たな社会ビジョンを紡ぎだした。すなわち洗練を求める奢侈的な消費欲求こそが経済の動因であり、功利的人間の情念に応じるために経済社会の向かうべき方向は、インダストリーの発展による「産業社会」の構築にあることを明快に論じて、ムロンやモンテスキューの商業社会観に一段の飛躍をもたらしたのである。ここにフォルボネの経済学の歴史的メリットが最もよく現れているといえよう。

彼は理論的側面において、多くの点で重商主義の固定観念を引き継いでおり、それが彼の体系の限界を画してもいたが、しかしそのような理論的限界にもかかわらず、彼が全体として示した経済・社会ビジョンは、重農主義の展開以降は、重農主義のそれに対する有力なオルタナティブともなっていく。すなわち、重農主義の地主社会論が政治的ドグマと化していく一方で、デュボン・ド・ヌムールの推進した1786年のイーデン条約によってフランス産業が大打撃を被り、重農主義の理論の非現実性が露呈されるに及んで、フォルボネの生産力視点ないし「産業社会」の構想は重農主義批判の論拠となり⁽²⁾、さらには革命後に重農主義の地主社会論とルソー的平等主義への両面批判を通じて形成されるフランス産業主義の源流ともなっていく。この意味で、ムロンからカンティロンの一側面やグルネなどを経てフォルボネへと至るラインが示した現実接近のあり方や社会構想は、ケネーのまばゆい光の影で、しかし意外に豊かな伏流となつて19世紀にまで引き継がれていったとみることができるのである。

(注) (1) ケネーとフォルボネを比較的に論じた2つの邦語文献のうち、小池基之 [1987] は、両者の貨幣観と富観におもに焦点を当てて彼らの体系の相違を浮き彫りにしている。ただしその視点はケネーの側により近い。また菱山泉 [1962] の第3章第4節「フォルボネとケネー」は、おもに『百科全書』

への寄稿論文を中心にフォルボネの理論・政策体系をまとめ、これをケネーのそれと比較したものである。なお『原理と考察』における重農主義批判は、第1巻第2部でミラボアの『人間の友』第6部の「説明付き経済表」に対して、また第2巻第3部でケネーの「借地農論」と「穀物論」に対して行われている。

- (2) 重農主義の自由貿易論に基づいて英仏間の自由貿易体制を構築しようとして、デュボン・ド・ヌムールが推進したイーデン条約（英仏通商条約）によって、フランス産業は大打撃を被り、フランス革命の遠因となったとさえいわれる。津田の注目すべき研究によれば、この条約をめぐる当時の論争において、フォルボネの議論がデュボン批判の論拠として用いられた（津田 [1985]）。

[参考文献]

- Dangeul, P. de [1754] *Remarque sur les avantages et les desavantages de la France et de la Grande-Bretagne*.
- Fleury, G. [1915] *François Véron de Forbonnais, sa famille, sa vie, ses actes, ses œuvre, 1722-1780*, Mamers et Le Mans.
- Forbonnais, F. V. de [1754] *Elémens du Commerce*, 2vols.
- [1767] *Principes et Observations Economique*, 2vols.
- Larrère, c. [1992] *L'invention de l'économie au XVIII^e siècle, Du droit naturel à la physiocratie*, Paris.
- Meyssonnier, S. [1989] *La Balance et l'Horloge, La genèse de la pensée libérale en France au XVIII^e siècle*, Paris.
- Morrison, Ch. et Goffin, R. [1976] *Questions financière aux XVIII^e et XIX^e siècles*, Paris.
- Murphy, A. [1986b] "Le développement des idées économiques en France (1750-1756)," *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, t. 32.
- Schelle, G. [1897], *Vincint de Gournay*, Paris [Genève-Paris, 1984].
- Schumpeter, J. [1954] *History of Economic Analysis*, Oxford University Press (東畑精一訳『経済分析の歴史』1955年).
- Turgot [1759] "Eloge de Vincent de Gournay," in *Œuvres de Turgot*, éd. par G. Schelle, Paris, 1913, t. 1, (津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 1962年)
- Tusda, T. (éd) [1983] *Traité sur le Commerce de Josiah Child et Remarques inédites de Vincint de Gournay*, Tokyo.
- (éd) [1993] *Memoires et Lettres de Vincint de Gournay*, Tokyo.
- Véron Duverger [1900] *Etude sur Forbonnais*, Paris.
- Weulersse, G. [1910] *Le mouvement physiocratique en France de 1750 à 1770*, 2vols., Paris.
- 菱山泉 [1962] 『重農学派と「経済表」の研究』有信堂。
- 小池基之 [1987] 「二人のフランソワ—François Véron de ForbonnaisとFrançois Quesnay—」『敦賀論集』(敦賀女子短期大学)第2号。
- 津田内匠 [1976-80] 「Vincint de Gournayの未発表資料(I-1)(I-2)(II)」『経済研究』第27巻第3号, 第28巻第1号, 第32巻第2号。
- [1976] 「チュルゴ」経済学史学会編『「国富論」の成立』岩波書店。
- [1979] 「自由放任 Laissez faire, Laissez passer 論の原型—Marquis d'ArgensonとVincint de Gournay—」『経済研究』第30巻第3号。
- [1982] 「1750年代のフランス経済学の動き」『Study Series』(一橋大学古典資料センター) No. 1。
- [1984a] 「フォルボネの保護主義(1)—その形成と初期の未発表手稿『農業と商業と財政にかんする試論』の検討—」『経済研究』第35巻第4号。
- [1984b] 「プリュマル・デュ・ダンジュール『商業とその国力の源泉にかんするフランスとグレート・ブリテンの利点と不利点の考察』(1754年)」『東京経学会誌』第137号。
- [1985] 「自由貿易と保護主義の相克—18世紀のイーデン条約をめぐる—」杉山忠平編『自由貿易と保護主義』法政大学出版局。
- [1992] 「解説 カンティロン—企業者とディリジスムの経済学—」R. カンティロン, 津田訳『商業試論』名古屋大学出版会。
- 米田昇平 [1997] 「奢侈論争と経済学—フォルボネを中心に—」『経済学史学会年報』第35号。
- [1999-2000] 「J.-F. ムロンの貨幣的経済論と奢侈論—貨幣論争と奢侈論争—(上)(下)」『下関市立大学論集』第43巻第2号, 第3号。